

南部アフリカに舞う緑の蝶

モパネとの出会い

アフリカ南部に位置するナミビア共和国をはじめて訪れた2006年の8月は、ちょうど乾季の中盤だった。私は、ナミビアで調査地を決めるために車で国内をめぐっていた。ナミビアは沿岸部にナミブ砂漠が広がり、そこから内陸部に向かうにつれ降水量が徐々に増加していく。ナミビアの魅力の一つは、降水量の変化にともなう景観が大きく変わっていくことである。砂丘地帯から荒涼な岩石砂漠地帯、そして低木がまばらに生育する灌木地帯…。車窓から眺める景色はさまざまに変化していき、新たな研究への期待はいやがおうにも高まった。

旅も後半にさしかかり、ナミビア北西部に入った時のことだった。これまで枯れた草や葉を落とした低木ばかりの黄土色だった大地に、突如一面の緑が目立ち始める。それまでの行程では、葉をつけた樹木は季節河川に沿って線状にわずかにみられただけだった。そのため、緑がひろがるその場所へ立つと、それまでとは全く違った環境に来てしまったかのような不思議な気持ちが芽生えた。さらに、緑の葉をよく見てみると、小葉が2片あり、蝶のようにもハート

のようにもみえるカタチである(写真①)。これはいったいなんだろうと、あっという間に惹きつけられてしまった。

乾季にもかかわらず緑の蝶が舞っているようにみえた木は、モパネ(*Colophospermum mopane*)というマメ科ジャケツイバラ亜科の半落葉樹である。モパネは雨季の直前まで葉を落とさないで、他の樹木が落葉している乾季の中頃はまだ葉をつけ続けていたのであった(写真②)。モパネが現れた瞬間の景観の変化に目を奪われた私は、それまで研究対象にしようとは思っていなかったモパネに注目することに決め、それ以来モパネが生育している場所で研究を続けている。

84



写真①モパネの葉

モパネの謎

モパネはナミビアだけでなく、南部アフリカの広域に分布している。たとえば、ザンビアやマラウイを訪れた際にも、モパネのひろがる植生が広い範囲で観察できた。

ナミビアではモパネは主に低木状であり、樹高は1-2m、高いものでも10m程度である。また、その多くが2本以上の幹がある複幹の個体だった。しかし、ザンビアやマラウイのモパネは、ナミビアで調査しているモパネと全く違った特徴もっていた。ザンビアやマラウイでは、モパネの樹高が20mにも及び、ほとんどが1本の幹(単幹)であった(写真③)。また、ゾウが多数出現する国

立公園の周辺では、ゾウにとってモパネの葉が大好物であるために、樹形がその地域だけ変化していた。すなわち、高木の幹がへし折られ、ゾウによって食べやすい低木状のモパネがその周辺だけに密集しているのである(写真④)。

いずれの地域でも、モパネがみられる場所では、他の樹種は少なく、モパネが生育する樹木の大部分を占めていることが特徴的である。このようにモパネが「優占」という特徴は、全ての地域で共通している。しかし、それぞれの地域の景観は、樹形に起因して大きく違っているのである。

広域に分布する樹木は多くあれど、樹形を変化させながら広範囲で「優占」する単一種は世界でも珍しいのではないだろうか。モパネがなぜこういった特徴をそなえるのかについては十分にわかっておらず、砂漠に近い乾燥地から熱帯雨林に近い地域にまで、多様な環境下で生育している要因を探ることは、アフリカの植生研究においても興味深い課題となっている。

モパネと地域の人びと

モパネは、分布地域の人びとにもさまざまなかたちで利用される。もっとも直接的には薪や建材としての利用が顕著である(写真⑤)。人びとはモパネを薪にすると煙が少なく火持ちが



写真②はじめて出会ったナミビアのモパネ林



写真③ザンビアのモパネ林



写真④ゾウに採食されたモパネ林

よい、建材にするとシロアリに食べられないと語り、モパネを好んで利用する。また、ナミビア北西部ではモパネがヤギの重要な採食資源になっていた。とくに採食資源の少ない乾季には、モパネが採食物の大半を占め、ヤギの生存を担っているかのようである(写真⑥)。人びとはモパネを採食する家畜の乳や肉を利用することにより、間接的にモパネの恩恵を受けているのである。

さらに、モパネの間接的な利用として、「モパネワーム」を挙げないわけにはいけない。モパネワームは、モパネの葉をエサとするヤママユガ科の蛾の幼虫である。幼虫が発生する季節には、モパネにびっしりとモパネワームが着き、大量に採集が可能となる。そのためモパネ林がひろがる南部アフリカにおいては、モパネワームが広く食用とされており、町のマーケットでは乾燥



写真⑤モパネ林での薪の採取



したモパネワームが売られている風景をしばしばみかける(写真⑦)。日本では「ゲテモノ」扱いされがちな昆虫であるが、南部アフリカの多くの地域では、魚や肉と同じように好かれており、日常のおいしいおかずのひとつとなっている。モパネワームは、こうした食用昆虫の中でも最も知られている虫のひとつであろう。ボツワナの5プラ硬貨の絵柄がモパネの葉とモパネワームであることが、なによりもそれを示している。

地域の植生を知ること

モパネのような地域を特徴づける植生は、生態環境や人びとの生活と深く関わっており、人びとにさまざまな恩恵や制限をもたらしている。そして私にとって南部アフリカのモパネを、緑の蝶を捕まえるように追い求めることは、地域の人びとの暮らしを知る恰好の手がかりとなっているのである。

手代木功基



写真⑦市場で売られているモパネワーム